

平等主義的正義論の中での〈運〉の意味

——リッパート-ラスムッセンによる理路に即して——

西 口 正 文*

The Meaning of *Luck* in Theories of Egalitarian Justice
—— Grounded on the Reasoning by Kasper Lippert-Rasmussen ——

Masafumi NISHIGUCHI

構成

- 〔始〕〈平等〉と〈運〉と〈正義〉がいかにして結びつけられるべきなのか
- 〔壱〕運の平等論をめぐるひとつの理路
 - 壱-1. リッパート-ラスムッセンによる理路の提示
 - 壱-2. リッパート-ラスムッセンによる理路に向けての第一次的論及
- 〔貳〕理路の読解
- 〔参〕「水準低下論」の性質
 - 参-1. 水準低下論をめぐる命題の連接
 - 参-2. 論点の考察
- 〔終〕結びに代えて

〔始〕〈平等〉と〈運〉と〈正義〉がいかにして結びつけられるべきなのか

ひとの存在をその始原の相で対象化するならば、平等なる存在として捉えられるべきことになる。単なる手段としてではなく、つねに同時に目的として捉えられ遇されるべき存在だ、とするカント流の視座が、その捉え方を顕著に語っているわけだが、このカント流視座に限らず、ひとそれぞれが平等に尊重されるべきだとするのは、規範的な議論を組み立て展開していくにあたっては、これを拒むことのできない出発点に据えられてよいだろう¹⁾。

いま述べたことを踏まえて、次に、ひとそれぞれへの遇し方の〈正義〉はどうあるべきか、という視軸を新たに導入することによって、思考を推し進めてみよう。始原の相においては平等であった諸個人それぞれが、それぞれの行為を積み重ねていく過程で、正邪善悪の観点から制御できることを制御しつつ行為するか否か、言い換えれば、果たし得る責

* 人間関係学部 人間関係学科

任を果たすという行為の積み重ねがあるかどうか、また、その度合がどの程度なのか、それらについての相違が、各人への処遇の相違としてもたらされてしかるべきだ、というように考えるのが妥当であろう。そのことを要約して、各人はその行為における責任の果たし方の相違によって処遇に差異が生じてしかるべきだ、というように表現しておこう。

さらに次に、各人の行為の積み重ねにおける責任の果たし方の相違と、各人の行為に見て取れる成果の相違と、これら双方の関係を対象化してみよう。その際にあらためて確認されるべきなのは、前者においては各人にとって制御し得ることを制御し得ているか否かが問われるのであり、後者においては各人の制御可能度合とは無関係にそれぞれの行為の成果がどれほどであるか、その多寡や優劣が問われるのである。双方を峻別することは、各人への処遇の正義の在り方を考えるに際しては、殊のほか重要なことになる。前者の相違には介在せず、後者の相違においてのみ介在する事柄を、〈運〉と呼ぶことにしよう。その呼び方は、このことばの通用的な含意から大きく隔たっているわけではないであろう。

ここまで述べてきたことを踏まえるならば、〈正義〉の在り方を探究しようとする試みにおいては、〈平等〉という概念のみならず、〈運〉という概念がそれを欠いては探究のための礎石を失ってしまうほどの大切な意味をもつこと、そのことが汲み取られるであろう。この小論においては、平等主義的正義論において担われるべき〈運〉の重要な意味を、訴えていこうとする。平等主義的正義論の中で〈運〉に注目する議論は——運の平等論は——それなりに蓄積を持つものではあるが、全体の中ではいまだ劣勢にあると見ることもできるように思われる。小論では、運の平等論の意義を明確化することを図り、さらにその課題を見出すことを企図する。こうした企図のもとに思考を深めるための手がかりとして、まずは、カスパー・リッパート-ラスムッセンの提示する理路を生かそうとする（一第壹節）。そして次に、リッパート-ラスムッセンの理路に対する、筆者の読解を提示しようとする（一第貳節）。さらに、平等主義的正義論への最も代表的な批判のかたちとして知られる「水準低下論」を採り挙げ、その性質を解明しつつ、運の平等論がそれを克服できることを示そうとする（一第参節）。

〔壹〕運の平等論をめぐるひとつの理路

壹-1. リッパート-ラスムッセンによる理路の提示

広く平等主義的正義論として概括される議論群の中で運の平等論は、現状における外見として言えば、けっして主導的な位置づけが与えられたり勢力を発揮したりしているわけではない。主導的勢力の発揮という観点からは、むしろ「社会関係に照準する平等主義」（もしくは、「社会関係の平等論」と称する議論の動向を採り挙げるのがふさわしいように思われる。平等主義的正義を標榜する議論群に属する各論の間の勢力関係についての立ち入った言及に、ここで触れることはしない。この節で採り挙げようとするのは、「社会関係に照準する平等主義」との対照において運の平等論の特徴を、いくつかの命題の連なりというかたちにおいて示そうとしたところの、リッパート-ラスムッセンによる理路の提示である。これを採り挙げることを通して、平等主義的正義を標榜する諸議論の中で運の平等論の持つ存在性格が、浮き彫りにされてくる、と思われるからだ。

リッパート-ラスムッセンによる理路とは、彼の著書『運の平等論』（2016年）の中の

第七章「社会関係の平等論」対「運の平等論」の行論において示されているものである。それは、以下に示す命題①から始まり命題⑬に終わるところの論理展開のかたちを採って、表われている。

- 命題①：あるひとつの社会の中で生きる諸個人が他のひとと同等なるものとして関係し合っている、という条件のもとにおいてのみ、そのあるひとつの社会は正当である。
- 命題②：もし仮に、ある道德原理に基づいて行為することにおいてひとが道德上反対すべき、すなわちあるまじき態度を表現することになる、ということが、当の道德原理それ自体に対する反対意見になるのだ、ということを前提にするならば、必然的に、当の道德原理に基づいて行為することにおいてひとは、道德上反対すべき態度を事実上、表現していることになる。
- 命題③：必然なる事柄として、ある道德原理に基づいて行為することにおいて、ひとが道德上反対すべき態度を表現するということは、いかなる道德原理にも当て嵌まりはしない。
- 命題④：それゆえに、ある道德原理に基づいて行為することにおいてひとが道德上反対すべき態度を表現する、というかたちを採った言挙げは、ある道德原理それ自体に対する反対意見なのではない。
- 命題⑤：運の平等論はひとつの道德原理であり、そしてまた、哀れみは道德上反対すべき態度である。
- 命題⑥：それゆえに、運の平等論に基づいて行為することにおいてひとが哀れみを表現するというかたちでの言挙げは、運の平等論それ自体に対する反対意見なのではない。
- 命題⑦：あるひとに対して他のひとがなし得る道理に適った要求に、あるひとが従いはしないことを、ある事態が含み込んでいる、という条件のもとにおいてのみ、そのある事態は不当である。
- 命題⑧：あるひとに対して他のひとがなし得る道理に適った要求に、従うのに失敗している当のあるひとが、当該事態の生起し行き渡るのを防ぎ得る、という条件のもとにおいてのみ、その事態は、他のひとがなし得る道理に適った要求に従うべきあるひとの失敗を、意味している。
- 命題⑨：もし仮に、ある事態の生起し行き渡るのを防ぐことが人間の能力を超えているのであるならば、その事態の生起し行き渡るのをくい止めることのできるひとは、ひとりもない。
- 命題⑩：自然によって賦与されたモーツァルトの音楽上の才能が、自然によって賦与されたサリエリの音楽上の才能に比してより大きなものであること、そのことを防ぐのは、人間の能力を超えている。
- 命題⑪：だからして、モーツァルトの持つ音楽上の自然的才能が、サリエリの持つそれに比してより大きいことを、だれひとりとしてくい止めることはできない。
- 命題⑫：したがって、自然によって賦与されたモーツァルトの音楽上の才能が、自然によって賦与されたサリエリの音楽上の才能に比してより大きなものであること、そのことを防ぐようにだれに対して要求することも、道理に適った性質を欠くことに

なる。

命題⑬：かくして、モーツァルトの持つ音楽上の自然的才能が、サリエリの持つそれに比してより大きい、という事態は不当だ、ということが真相なのではない。

壹-2. リッパート-ラスムッセンによる理路に向けての第一次的論及

ここでは、上記の命題の連なりを以って表わされた、リッパート-ラスムッセンによる理路に向けて、第一次的な論及を行なうことにする。

まず、命題①を対象化しよう。命題①自体は「社会関係の平等論」の輪郭を素直に表わしたものである。「社会関係の平等論」を唱える者たちはこの命題を論拠として、「運の平等論」を批判しようとしてきた。その際のひとつの論点は、果たし得る責任を果たすことを怠った行為者へ向けて「運の平等論」が過酷な処遇をするのを正当化してしまう性質を帯びている、と捉えるところにあった。もうひとつの論点は、行為者への社会的処遇のありようをめぐる、運の介在によって生み出される不利を補償しなければならないとする局面で、その補償の対象となる行為者に屈辱を与えることに無感覚である、と捉えるところにあった。批判対象とされるこれらふたつの論点に関して、それらがもたらされる原因が、「あるひとつの社会の中で生きる諸個人が他のひとと同等なるものとして関係し合っている、という条件」が「運の平等論」においては充たされないところにある、とみなされる傾向が見て取られた。

上記ふたつの論点それぞれに関して、若干の説明をしておこう。はじめの論点に関して。想起されるべきなのは、次のような思考実験としての事例である。具体的には、運転者として負うべき責任意識を欠いた無謀な運転を行なう自動車運転者が事故を起こし、その際にその事故に巻き込まれた歩行者がいて、歩行者の方は規範を遵守し責任を十分に果たしていた、という事例を採り挙げてみよう。さらに、無謀運転を行なった者は瀕死の重傷を負い、歩行者の方は軽傷であった、としよう。そしてさらに、その事故発生後の時点では救急発動して病院へ搬送するための自動車が一台しかなく、また負傷者への救急の医療措置を講じられる医療施設と人員が、負傷者ひとりに対応し得るにとどまる、と仮定しよう。この場面への対処のあるべき姿として〈運の平等主義〉に拠って立つ思考の筋道からは、一方では、責任を果たしていた軽傷者を救急車で救急対応可能な病院へ運び、他方では、瀕死の重傷者を放置するべきだ、と考えそのように対処しなければならない。上記の対処事例は、「社会関係の平等論」を唱道する立場から「運の平等論」のもつ“過酷な対処”の例として非難がなされる傾向がみられた。負うべき責任を果たさなかったからと言って瀕死の重傷者を放置するのは、いわば人道主義的配慮を欠く措置であって、たとえすぐさま利用できる救急車と救急医療施設が見当たらずとも、何らかの救助行為がなされるべきだと考えるのが、「あるひとつの社会の中で生きる諸個人が他のひとと同等なるものとして関係し合っている、という条件」を満たそうとするための筋道だ。そのようにみなされる傾向が見て取られた。これに向けて「運の平等論」の立場からは、人道主義的配慮を斥けようとする含意は「運の平等論」には無縁である、と返すことができた。その際に、人道主義的配慮の尊重という論脈は、〈運〉と〈責任〉と〈正義〉との関係を解明しようとする論脈とは区別されるべきものだ、と付け加えることになるだろう。

もうひとつの論点——運の介在によって生み出される不利を補償しなければならないと

する局面で、その補償の対象となる行為者に屈辱を与えることに無感覚だ、とする論点——に関して。想起されるべきは次のような思考実験としての事象である。不運としての重度知的障害と重度身体障害を重複して持つひとが、その善き生としての生存保障のために欠くことのできない手段としての条件のひとつに、勤労所得というかたちで十分な社会的基本財を獲得できないことを補償する意味において、公共性を帯びた財源から社会的基本財の給付を得ることが挙げられる、としよう。さらにまた、公共的給付の妥当性を示すにあたってのひとつの原則である公示性という観点から、この給付を得るために、当人が所定の社会システム上の賃労働に携わることのできないことを証明するための資料を、(当人が、もしくは、当人の家族などが)公共機関に提出しなければならず、同時にそのことがその社会構成体の他のひとたちに知らされることになる、という事象である。「運の平等論」の立場に依拠すると、重度障害のゆえに勤労所得を得られぬ場合にも、十分な勤労所得を得る場合に引けを取らぬだけの十分な社会的基本財の獲得がなされるべきだとするところから、この種の事象が起り得ることになる、と「社会関係の平等論」を唱道する立場からは論じられる傾向がある。同時にこの種の事象では、公共性を帯びた財源から社会的基本財の給付を得る手続き上の過程で、給付を得るひとに対する屈辱が不可避免的に与えられることになる、と「社会関係の平等論」を唱道する立場からは論じられる傾向がある。この種の議論の運び方に向けて「運の平等論」の立場からは、〈運〉と〈責任〉と〈正義〉との関係を解明しようとする立論の核心から逸れることを許さなければ、それが誤解に基づく批判であることが判明するであろう、と切り返すことができた。

次に、命題②から命題⑥までの流れを対象化して、そこから汲み取ることのできる理路を浮かび上がらせるようにしよう。この流れから汲み取ることのできる理路とは、こうである。すなわち、前段落で採り挙げたひとつの論点、即ち、運の平等論を以って補償されるべきだとするひとに向けて、屈辱感を与える、もしくは“哀れみ”の感情を抱く、という事態を引き起こすのであるから、運の平等論が平等論の内容として重大な過ちを含んでいる、とする論点、これを掘り下げて対象化することによって——論理展開上の特質に注目することによって——、当の論点の提示が運の平等論に対する反対意見にはなり得ていないことが露呈する、という理路だ。

さらには次に、命題⑦から命題⑬までの流れを対象化して、そこから汲み取ることのできる理路を浮かび上がらせるようにしよう。この流れから汲み取ることのできる理路とは、こうである。すなわち、各人の持つ能力や資質について対象化するならば、それらが生得的で自然的な諸力の合成態として立ち現われる部面を、各人の顕在的に発揮できる力の土台をなす部面として持つこと、これを否定することはできない²⁾。各人の持つ能力や資質の土台部面の分布のありようが自然によって決められること自体は、道徳上の非難を受けることでもなく、道徳上の称賛を受けることでもない。道徳上の正しさに沿うことは、各人の持つ能力・資質の相違を、目的としての存在者であるという各人の存在性格と調和させるかたちで、取り扱うことになる。各人の能力・資質のありようをめぐる正義の在り方とは、そのような方向において捉えられるべきなのだ。大要として言えば、このような理路である。

〔式〕 理路の読解

前節においては、リッパート-ラスムッセンによる理路を描き出すことに主眼を置いて、叙述を展開した。そこでの叙述内容を踏まえつつ、この節では、リッパート-ラスムッセンによる理路の提示に触発されるかたちで、当の理路の読解を深め進展させることを通して、〈運の平等主義〉による理路へ向けてのいっそう立ち入った解釈を、叙述することにしよう。

〈運の平等主義〉が乗り越えようとする議論の中には、リバタリアンによる自己所有権に依拠する議論が含まれている。とはいえ、その克服ということに主力を注ごうとするわけではない。その議論と根底では通じ合う要素を持ちつつも、社会関係の平等化や民主主義的平等化を目標とする、という様相を呈しつつ、〈運の平等主義〉のめざす人間関係や社会の在り方が誤っているという攻撃的な主張を行なうところの、エリザベス・アンダーソンに代表される議論の動向、これをむしろ克服する必要性を感じ取っているだろう、と推察される。小論が主たる考察対象としているリッパート-ラスムッセンの著書、これの第七章「社会関係の平等論」対「運の平等論」において、主としてアンダーソンによる批判に対応しつつ、それが「運の平等論」への基本的誤認に基づいているのを、示しているところからも、そのことが窺い知られるだろう。その推察に際して看過されてはならないと思われるのが、アンダーソンによる次の言明である。

社会契約説の自由民主主義的説明によれば、政府の基本的な目標とは市民の自由を保障することである。民主的な政府とはまさに集合的にふるまっている市民にほかならないのであるから、市民相互の間での市民の基本的な責務とは各人の自由についての社会的条件を確保することだ、ということになる。リバタリアンもまたこの定式を奉じるがゆえに、この定式はリバタリアンの含意している事柄へと導く、と思われるかもしれない。民主主義的平等論はこの定式を、拒絶するのではなくて解釈する。自由な生活を送ることの社会的条件とは、ひとが他者たちと平等な関係にあるということだ、ということはこの定式は主張する。[Anderson, Elizabeth S. 1999: 314-315]

ここで述べられている「民主主義的平等論」(democratic egalitarianism)とは、社会関係の平等論の内実をよりよく表わすことのできる語としてアンダーソンが選び取っている語である。上掲の言明から見て取られるのは次のことである。個人の自由を——市民の自由を——保障しようとするところに民主主義的平等論≡社会関係の平等論の中心が据えられ、その周囲には、自由を保障されるべき各人相互の平等な関係が位置づく、とされていること。とはいえ、各人相互の平等な関係が位置づくことが可能なのはなぜかについての理由が示されているわけではない、ということ。さらに注目に値するのが、個人の自由の保障に基礎を置くこうした議論の構制がリバタリアンによる思想的含意との結びつきを持つことが認識されている、ということだ。上記引用箇所が続く箇所[op. cit. 315]では、民主主義的平等論とリバタリアンによる思想との相違が、各人の自由についての社会的条件を確保すべき市民相互間の責務について、その解釈の仕方の相違にあるのだ、ということも述べられている。とはいえ、その解釈しかたの相違がどこにあるのか、という肝腎の

点については、リバタリアンによる思想が他者を尊重する態度に欠けるがゆえに自由の社会的条件についての理解が関係上の拡張可能性を欠いた狭い範囲に限定されてしまう、という指摘が見られるものの、その弱点を民主主義的平等論がいかにして克服し得るのか、という点については説明力を欠く記述に終始している³⁾。むしろ、著者の説く「平等主義の要点」(the point of equality)が、近代の政治的国家・市民社会における「基本的人権」観念に依拠して通念化されてある社会的平等の観念、その表層に、内容の上で留まっていること、そのことが看取される。

上述の、民主主義的平等論≡社会関係の平等論に孕まれている問題点を克服するためには、平等主義的正義を志向する議論の視軸を〈運〉へと向ける必要があるのだ、と主張するところに、運の平等論の特質がありその存在意義が認められるのである。議論の潮流に見て取られるこうした基本的な対立構図を背景にして、リッパート-ラスムッセンによる理路が解釈される必要があるだろう。

社会関係の平等論の側からの・運の平等論に対する・批判内容となっていたふたつの事柄——行為者の責任を重視するが故の「過酷性」を帯びる、もしくは、「反直観性」を帯びるという内容、および、公共的社会的補償を受けるひとに屈辱を与える、もしくは、「負の烙印」を与えるという内容——に、運の平等論が応答するにあたって、その思想の規範的な本質をどのようにして明示することができるのであろうか。この点については、既に前節において第一次的な応答内容を示した。それを踏まえて次には、さらに掘り下げた考察を試みることにしよう。

第一の事柄、すなわち、行為者の責任を重視するが故の「過酷性」を帯びる、もしくは、「反直観性」を帯びるという内容をめぐっては、無謀運転で事故を起こした場合の対処に即して、既に前節で相当に掘り下げて考察したので、ここで補足すべきことは多くない。ただ、アンダーソンの提示している次の問題事態について〔Anderson, Elizabeth S. 1999: 303-304〕言及しておこう。アンダーソンによる運の平等論の捉え方によると、一般的な美醜に関する見方によると“醜い”容貌をもって生まれたひとたちにとっての求職活動→希望する職の獲得という場面では、そのひとたちへの社会的な補償措置として、美しさに恵まれた者たちよりも優先権をもって希望する職を有利に得ることができるようにすることが、運の平等論からすると肯定されることになる。しかしそれを肯定するのは「反直観性」を帯びることになる。この反直観性をもたらす運の平等論には、規範的な立論の在り方として無理がある。このように批判されてきた。この批判に対して、運の平等論はどのように応答することができるのであろうか。その合理性基準を特定するのが困難とは言えない意思決定の場に位置づくところの、求職活動とそれに対応する雇用の決定（希望する職の獲得）という場面では、容貌の美醜に起因する処遇の有利/不利を持ち込ませないように制度設計することは可能である。もっと微妙な人間関係の場面で、特に私的な関係場面で、容貌の美醜に起因する有利/不利が起こること、それは経験的世界で起こり得ることだが、その種の問題場面向けて運の平等論の立場が、社会公共的な補償の措置を取るべきだと主張することには、ならない。その問題化は、ミクロの間柄としての人-間をめぐる倫理の在り方を問うという別の問題次元になる⁴⁾。

第二の事柄、すなわち、公共的社会的補償を受けるひとに屈辱を与える、もしくは、「負の烙印」を与えるという内容に関して、掘り下げた考察を試みておこう。問題化の対象と

なる事態としては、既に前節で触れておいた次のような事態を採り挙げよう。重度障害のゆえに勤労所得を得られぬ場合にも、十分な勤労所得を得る場合に引けを取らぬだけの十分な社会的基本財の獲得がなされるべきだとするとところから、生存保障に欠くことのできない手段を得るための条件として、公共性を帯びた財源から社会的基本財の給付を獲得できなければならないこと、そして、この給付を得るために自力では勤労所得を得られないことを証明する資料を、公共機関に提出しなければならず、同時にそのことがその社会構成体の他のひとたちに知らされることになる、という事態だ。

アンダーソン流の、運の平等論に対する批判論においては、自ら勤労に携わり得ないことを不運とみて、その不運に曝されたひとが公共的な補償を得ることににおいて屈辱を与えられたり負の烙印を与えられたりすることになる、とする認識が、疑念の余地のない認識としてはたらいっている。アンダーソン自身がそれを——補償を受けるひとたちに向けて、補償措置を講じるために設けられた主要機関「国家平等委員会」が次の内容の通知書面を届けることになる、という想定の下に——明瞭に語っている箇所を、引用しておこう。

障害者たちへ：あなたたちの欠陥を伴った生得的賦存は、あるいは、あなたたちのいまも継続している障害は、残念なことに、健常な者たちの生に比べてあなたたちの生を、価値を感じて生きていく度合についてより劣った状態にさせています。この不運に向けて補償するために、われわれ有能さに恵まれた者たちは、あなたたちの生をあなたたちが価値を感じて生きていけるようにするに充分足りるように、他のひとたちに比べて引けを取るわけではないと思えるに充分足りるように、あなたたちに特別に追加する資源を提供します。[Anderson, Elizabeth S. 1999: 305]

上掲の引用箇所の含意、および、これを以って重度障害を持つひとへの負の烙印が押されることになるとするアンダーソンによる議論の運び、そこから窺い知られるのはどのようなことか。この書面に表われた言辞を素直に、あるいはまた好意的に、読むならば、アンダーソン自身、障害を持つひとたちが障害を持たぬひとたちと比べて引けを取らない善き生を生きられるようにするために、善き生を生み出し支える手段となり得る資源が社会公共的に補償されてよい、という認識を持っている。つまり、社会公共的補償という結果が得られるのが良い、という認識を示している。しかしながら、その結果を生み出す過程において障害を持つひとたちにとっての「屈辱」感をもたせたり「負の烙印」の付与がなされたりしてしまうのを、避けられない、と捉えることになっている。規範的な観点から、結果については消極的ながら支持してもよいが、その過程については支持できない。この分裂もしくは不釣り合いはいかにして生じるのであろうか？ 端的に言うと、結果についての支持の根拠が薄弱であるところから、この分裂が生じるのだ。つまり、社会公共的補償という結果を支持する規範的意味の起源が把捉されず、曖昧さを留めたままの意識状態の中で——意識のおおいなる曇りの中で——いわば直感の相で、障害者への補償を支持してもよいだろう、とされているのだ。

いま述べたところの分裂の生み起こされる所以を、さらに問い詰めるべきであろう。まず、「国家平等委員会」による通知書面——この内容はアンダーソンの考え方を反映している——にある「(勤労所得に結びつく労働に従事できないという [……西口による補註])

欠陥を伴った生得的賦存」や「いままも継続している障害」が当人によって避けられることでない、それゆえ責任を負えることでない、というのは明らかなことだ。すなわち、〈運〉のもたらすことなのであって、その始原となる意味を明確に認識する場合には、件の障害者たちへの社会公共的補償という結果に到る過程で屈辱感の付与とか負の烙印の押しつけとかが規範的意味世界の中で生じる余地はない。むしろ、経験的な日常的意味世界の中では、“負の烙印の押しつけ”や“屈辱感の付与”という意味づけがなされることがあり得る。そうした意味づけが、平等主義的正義の在り方を論じようとする規範議論においては、誤りであるというほかない。その点への覚識が欠けているところから、当の分裂が生み起こされたのだ。規範議論において〈運〉のもつ意味の重要さが、このことによっても照らし出されてくるわけである。

〔参〕「水準低下論」の性質

この節では水準低下論 the levelling down objection に、運の平等論がいかに対処することになるのか、この問いに照準して考察する。考察のための手がかりになる先行研究として、ここではリッパート-ラスムッセンによる著書『運の平等論』（2016年）の中の第五章「目的論的平等主義と義務論的平等主義」に絞り込むことにする。

水準低下論は、平等論や平等主義的正義論と称される議論全般に対する強力な反論だ、とみなされてきている。そのように見なされてきた理由に敏感であろうとする構えを持ちつつ、平等論の議論全般のもつ、水準低下論に立ち向かう場面での弱点を、目的論的平等主義が克服できるのか、義務論的平等主義が克服できるのか、そして運の平等論ならばどうなのか？ このような問いを軸にして、リッパート-ラスムッセンの提示する理路に沿って考察を試みる。

参-1. 水準低下論をめぐる命題の連接

以下に記す命題（1）に始まり、命題（10）において終わるところの連接を、議論のための素材としてリッパート-ラスムッセンは提示している。

- （1） もしあるひとたちが他のひとたちに比してその暮らし向きが悪いのであるならば、そのこと自体が悪いことだ。
- （2） ある結果の起源が本質内在的に不公正であり、かつ、不平等を帰結している、という事態であるならば、当の起源は正当性に反する。
- （3） ある結果の基にある起源が本質内在的に不公正であるならば、当の起源からの帰結が平等になろうと不平等になろうと、その相違にはかかわらずに、当の起源は正当性に反する。
- （4） あるひとたちの暮らし向きが他のひとたちの暮らし向きに比して悪い、という不平等な事態が、当のあるひとたちのもつ平等な分配への権利を、侵害している、もしくは、他のあるひとたちのもつ攻撃的な選好に、適合した帰結になっている、という条件下で、生起しているならば、その事態は悪いことである。
- （5） ①暮らし向きの悪いひとたちがそのひとたち自身の過失なしに、もしくは選択なしに、暮らし向きの悪い状態に在る、という条件、②暮らし向きのよいひとたちが暮

らし向きの悪いひとたちのその悪い状態を作り出すことに、あるいは、その悪い状態を許容することに、因果関係の上で貢献した、という条件、これら①と②双方の条件を共に満たす場合に、あるひとたちが他のひとたちに比してその暮らし向きが悪い状態に在るならば、その状態はそれ自体、悪いことである。

- (6) 不平等が特定の意味脈絡においては、誰かあるひとに害悪をもたらすのであるならば、当の不平等は、外因性を帯びて、かつ、非道具的な様態で——目的それ自体という様態で——、悪い性質のものである。
- (6*) 平等から少なくともだれかあるひとたちが利益を得る、という（特定の意味脈絡が構成されているところの）条件のもとでのみ、当の平等は外因性を帯びて、かつ、非道具的な様態で、よい性質のものである。
- (7) 不平等が特定の意味脈絡においてというのではなくて、一般に、誰かあるひとに害悪をもたらすのであるならば、当の不平等は、本質内在的に、かつ、非道具的な様態で、悪い性質のものである。
- (8) ひとびとが平等な様態での暮らし向きである、という条件下では、よい暮らし向きは非道具的な様態で、よい性質のものである。他のどんな事柄も、非道具的な様態でよい性質になっているとは言えない。
- (9) あるひとつの結果がもうひとつの結果に比して、（いわば事実性において）どんな点においてもより悪くなっている、という条件下では、当のあるひとつの結果はもうひとつの結果に比してなんらかの点において、（規範性において）だれかあるひとにとってより悪い性質のものである。
- (10) ある行為または不作為がある程度まで不当である、もしくは、ある程度まで悪い性質を帯びている、という条件下では、この行為または不作為が生み起こされなかったとしたら、その事態があるひとにとっては、生み起こされた事態に比して、ある点においてよりよい様態になっている、そのようなあるひとが存在する。

上記の各命題の含意について、簡潔に敷衍しておこう。命題（1）の含意は、帰結主義の立場から不平等が不当だ——平等が正当だ——、と述べている。命題（2）は、起源と結果との相関に結び付けるかたちで、起源の正当性とは何かを否定態において示す、という含意である。命題（3）は、結果のありようにかかわらず起源の正当性とは何かを否定態において示す、という含意である。命題（4）は、ひとの暮らし向きの様態という観点から、起源と帰結との相関に結び付けるかたちで、帰結の正当性とは何かを否定態において示している。命題（5）は、帰結としての暮らし向き状態のよい集団と悪い集団との差異を対象化して、その差異が不当となるための条件を示している。命題（6）は、個人に害悪をもたらすという観点から指摘されるところの、不平等のもつ不当性を、帰結主義の立場と目的論の立場とを重ね合わせるかたちで、示している。命題（6*）は、個人に利益を与えるという観点から指摘されるところの、平等のもつ正当性を、帰結主義の立場と目的論の立場とを重ね合わせるかたちで、示している。命題（7）は、個人に害悪をもたらすという観点から指摘されるところの、不平等のもつ不当性を、義務論の立場と目的論の立場とを重ね合わせるかたちで、示している。命題（8）は、ひとがすべて平等で、かつ、よい暮らし向きにある、という様態が、目的論の立場から正当性をもつこと、これ

が示されている。さらに、目的論の立場から正当性をもつ様態が、これの他にはないことも、付け加えられている。命題(9)は、帰結主義の立場から、集合的な事態についての評価基準のいずれにおいてもより悪い事態が対象として与えられた場合、当の対象となる事態が個人にとってよいか悪いか、示されている。当の対象となる事態は、少なくともある個人にとって少なくともひとつの評価基準に照らして、より悪くなっている、と述べられている。命題(10)は、帰結主義の立場からの条件設定として、何らかの度合において不当であったり——正当性を欠いていたり——悪い性質を帯びていたりするところの行為または不作為が起こっているという事態が与えられた場合、当の事態と、謂うところの行為または不作為が起こっていない事態とを、個人の善き生に与える影響という観点から比べると、後者の事態の方が前者の事態よりもよくなっている、と述べられている。いずれの命題に関しても論理上の欠陥を指摘することは困難であろう。とはいえ、これらのうちで特に命題(6*)と命題(10)とについては、水準低下論と関連づけて次項(参-2)で再考することにしよう。

参-2. 論点の考察

前項での論及では件の命題接続について、未だ表面上の提示と敷衍にとどまっていたところを、この項では接続の中身を掘り下げて考察することにしよう。その際にあらためて想起されるべきなのが、「水準低下」を理由として平等主義的正義論に強力な反対説を投じてきた議論——水準低下論 the levelling down objection ——のもつ理論上の力であり、それがまず、ここでの検討対象になること、そしてこの議論を克服するためにこそ、件の命題接続が案出されていることである。その理路の提示が果たして、水準低下論を克服して、平等主義的正義論を、就中、運の平等論を、正義を志向する内容として示すことに成功しているのか否かを、考察する段である。

水準低下論の意味するところを簡単に述べておこう。ふたりのひとが——モニカとクリスティーヌが——ある島で暮らしていて、生存に必要な資源を産出するために、二人の共有している土地および農具や農作物の種子など各種の材料を、つまり生産手段を、共有し、共同で農耕に従事している、とする。モニカとクリスティーヌはそれぞれ一日につき八時間の農耕労働に尽力し続け、その尽力の度合は、それぞれの最大限に発揮しうる労働従事力を基準にして測るならば同じ度合であった、としよう。そしてまた、それぞれの産出した労働成果を比率として表わすと——それを正確に測定できると仮定して——、モニカが3で、クリスティーヌが1であった、としよう。ある一定期間の農耕の結果として、生存のために役立て得る資源量を20だけ産出したとする。この20をモニカとクリスティーヌそれぞれにどのように分配するのがよいのか？ これへの応答として、平等主義的正義の立場からは、モニカにもクリスティーヌにも10が分け与えられるべきことになる。この応答に向けて水準低下論は、次のように異議を唱えることになる。それぞれの労働成果の相違を反映することなしに平等分配することが、より有能なモニカの労働意欲を失わせることになり、次の生産期間における生産量を大きく低下させることになるであろう。この場合、クリスティーヌの労働意欲を高める可能性があるとはいえ、そのことによる生産増加量と、いま述べたモニカの意欲喪失による生産減少量とを比べると、後者の方が大きくなる。生産期間の累進につれてこの減少量も累進する。そうになると、モニカにとってもク

リスティヌにとっても獲得できる資源の量が減ってゆくことになる。したがって、平等主義的正義の立場は理に適っていないのであり、斥けられるべきだ。

上述のような水準低下論に依拠する、平等主義的正義への反論に向けて、平等主義的正義を志向する議論はいかにして対処することが可能となるのか？ この問題構制に基づいて、リッパート-ラスムッセンによる命題連接を考察すること、それがこの項での眼目となる。その考察を始めるのに先立って、基礎的な用語の含意を、いくつか説明しておこう。

「目的論的平等主義」telic egalitarianismと「義務論的平等主義」deontic egalitarianismという対比について。「目的論的平等主義」とは、目的合理性を帯びてある限りにおいて平等主義を擁護しようとする立場である。「義務論的平等主義」とは、道徳上の義務に沿って生み起こされ作用する、ひとの行為を介して、平等主義を擁護しようとする立場である。それぞれの立場から対象化し問題化しようとする事態について、その範囲が背反するかたちで峻別されるのか否か？ この問いへは、否と応じるのが妥当である。その範囲が重なり合うことがあり得るからだ⁵⁾。上記の対比と、「帰結主義」対「義務論」という対比とが、どのように関係するのかについて述べておこう。「帰結主義」とは、対象とする事態の結果という面に絞って評価判断する立場である。それに対して「義務論」とは、事態の起源と結果に介在するところの、ひとの意味志向性を帯びた行為の各々による媒介作用が、もしくは、諸行為の集合を統御し方向づける機関による媒介作用が、道徳上の理に適っているか否かという面に照準して、対象とする事態を評価判断する立場である。付随するかたちで留意されるべきなのは、「目的論的平等主義」が「帰結主義」に対応するわけではなく、「義務論的平等主義」が「義務論」にそのまま忠実に対応するわけでもない、ということだ⁶⁾。

義務論的平等主義が敏感であるべき対象は、ひとの意味志向性を帯びた行為の各々による媒介作用、もしくは、諸行為の集合を統御し方向づける機関による媒介作用に、限定されるのか？ この問いに向けては、否と応じることになる。人為の介在しない自然作用による、ひとの善き生のありように対する影響が、義務論としての方向を採る平等主義にとって対象化されるべき事柄となるからだ。たとえば、自然災害による、その善き生への負の影響を大きく被るひとたちと、影響を被らないひとたちとの間に見て取られる相違が、出来る場合、その相違への対処は、義務論的平等主義にとっての無視できない検討課題となる。

平等/不平等ということが、それぞれのひとへの社会的処遇の在り方を通してもたらされるところの、社会世界におけるそれぞれのひとの生のありようを比較することによって論じられるわけであるが、比較対象となる「それぞれのひとの生のありよう」とは何を以ってその指標とすることができるのか？ 端的に言って、「財」や「資源」を指標とするのか、それとも、「善き生」⁷⁾という包括的な観念で表わされる事柄を指標とするのか？ これについては、リッパート-ラスムッセンに従って、「善き生」を指標とするのが妥当だと考える。その理由は、水準低下を理由として平等主義的正義に反対する議論への対抗において、「財」や「資源」という指標ではなく「善き生」という指標の重要性が、後に示されるように、明らかになるからだ。

上記の用語に関する説明をふまえて、リッパート-ラスムッセンが主張し訴えている内容の要諦へと、考察の視軸を移そう。再度確認するならば、平等主義に依拠する議論が正

義を求める観点から考えても破綻することになる、と強力に方向づけるのが、水準低下論であった。その水準低下論自体の論理構成が正義の在り方を究明すべき視座として錯認を蔵している、ということを暴きたてるところに、リッパート-ラスムッセンによる主張内容の要諦を見出すことができる。そのことを、前項で示した命題(6*)と命題(10)を採り挙げて説明しよう。

命題(6*)については、水準低下論の側からの反論が次のように投げかけられるだろう。すなわち、平等の目的合理性という観点から命題(6*)の言明が示されている。これは、平等に匹敵する重要性を他の価値が持たないことを、暗黙の前提としている。その前提を受け容れない立場からは、この言明は真ではなくなる。その立場に立つ水準低下論にとって、個人の取得する財の量という観点からはどのひとにとっても、平等に比して不利にならず、ひとびとの集合にとってはむしろ有利になる分配が、諸個人への誘因という契機を発動させることによって、可能となる。六つ前の段落で例示したことを併せ考えるならば、このことが了解され易くなるだろう。

上記の内容に関連させるかたちで命題(10)への反論が、次のように投げかけられる。ロバート・ノージック流の権原理論に基づく自己所有権によって、いましがた再度の想起を促した例示において、平等主義による分配が予定されていた場合には総計20の財が産出されるに留まるところ、自己所有権を分配原理とするように予定される場合には、総計40の財が産出され、かつ、モニカが30を、クリスティーヌが10を、それぞれ分配されることになるでしょう。この後者の分配結果は、個人の取得する財の量という観点からだれの不利にもなっていない。こうした議論展開を通じて、この後者の分配が、水準低下論によって批判対象となる平等分配に比して、正義を志向する立場からは迷うことなく選ばれるべきだ。このような議論展開とその結論は、命題(6*)と命題(10)とに孕まれている論理上の曖昧さおよび含意される規範の在り方としての詰めの甘さから、もたらされるのだ⁸⁾。

上述のような議論の運びおよび結論づけ方は、その本質において、ジョン・ロールズによって主張されることになった「格差原理」の正当化の中にもまた、看取し得る。協働関係を力強く促進し生産的活動における効率の向上を図る、という目的に合理的に資する、という観点からその妥当性が受け容れられることの多い格差原理。これをあらためて、平等主義的正義にとっての始原に見て取られるべき意味志向の相から省察するならば、格差＝不平等を正当化するための基盤に水準低下論が据えられ機能していることが、見出されるであろう。そしてこの省察の中で見過ごされてはならないのが、格差原理による分配の遂行から生み出されるところの、相対的位置づけとして暮らし向きのより悪い地位に置かれたひとたちにとって、当の位置づけ方が——階層的地位への配置原理が——、当人にとって制御し得ずそれゆえ責任を負い得ない〈運〉の作用によって、色濃く影響されてあることだ。まさにこの〈運〉の作用によって導き出される、財や地位の分配のありようが公正さを欠くのであり、すなわち不正義なのだ。この覚識こそが、たとえ取得する財の量という観点からは不利になるひとがいない点を持ち出されたとしても、その点をはるかに凌ぐ重要性をもつのだ、と主張される。このように反論する途が、運の平等論の立場からは切り拓かれることになる。この項で提示してきたところの、モニカとクリスティーヌへの分配上の正義の在り方についての構想に立ち返って要約するならば、水準低下論に導かれる

かたちでクリスティーヌに比してモニカにより多くを分配するのではなく、ふたりに同等の分配をするのが、平等主義的正義の志向に沿うことになる。この結論を指し示すに到る論拠を与えるのが、まさに運の平等論なのだ。

〔終〕 結びに代えて

ここまでの議論を通してこの小論は、運の平等論が規範理論のうえで持つ意味と妥当性を、できる限り深く根底をなす層にまで遡って検討しようと試みた。この試みに際してはリッパート-ラスムッセンの提示する理路が示唆に富むこと、そのことを踏まえて、次の考察を行なった。まず、運の平等論に対する代表的な異議提起——「過酷性」を帯びるといふ異議および「屈辱性」を帯びるといふ異議——を対象化し、それらへの反批判として組み立てる理路のもつ妥当性を確認するという考察。次いで、水準低下論によって打倒されることなく、むしろ逆に、水準低下論の正義論としての脆弱性を覚識するという考察。

翻って、小論が立脚点とするのは、応答されるべき〈責任〉への応答の有無や度合が〈公正〉そして〈正義〉の有無や度合を判別することを可能ならしめる、ということであった。このことの、規範理論上の妥当性について、さらに深めることが、課題として意識されること、このことを記して擱筆する。

註

- 1) 井上彰〔2010〕における「究極的価値としての平等」の提唱——規範的価値・原理をめぐる議論の究極的拠り所として「平等」を定位すべきだとする提唱——が、ここで参照されてよいだろう。また、ロナルド・ドゥオーキン〔2000〕の基本的視座が平等を格別に重んじていたことも、ここで想起されてよいだろう。
- 2) 各人の発揮しうる力とは、いま述べた部面を土台にしつつ、その上に、各人それぞれの制御できる部面での力を合成してもたらされるところの合成態として、考えられることになる。
- 3) ここに述べた、アンダーソン流の民主主義的平等論の孕む問題点について、筆者は同内容の指摘をかつて行なったことがある〔西口2015a: 37〕。その再論である。
- 4) この事柄について、筆者は類似の言及をかつて行なったことがある〔西口2015b: 42-43〕。その再論である。
- 5) この対比は、リッパート-ラスムッセンに依拠している。なお、平等論の場にこれらの用語を導入した論者はアレク・パーフィット〔Parfit, D. 1998〕だが、パーフィットにおける含意からは逸れる意味が、ここでの対比には込められている。
- 6) ただし後者については、明晰な解釈のもとではその対応がかなり強い度合で見られること、これを否定し得ないのだが。
- 7) これを、「暮らし向きの善さ」という語に置き換えることもできるであろう。
- 8) 筆者によるこの指摘に到らしめる知的触発力を、リッパート-ラスムッセンによる議論は有している。その議論の中では水準低下論が（パレート効率との関連性にも配視されつつ）、ラリー・テムキンによる「スローガン」(the Slogan) についての論及を媒介として、批判的に対象化されている (cf. Temkin, L. 1993: 248-282)。「スローガン」という理論装置を介して水準低下論の存立機制を解明し、水準低下論への批判深化を図ることは、探求にあたいする論題であるが、この小論では立ち入ることができない。機会をあらためて探求したい。

文献

- Anderson, Elizabeth S., (1999), “What is the Point of Equality”, in *Ethics*, 109(2) pp. 287–337
- Dworkin, R. (2000), *Sovereign Virtue*, Harvard University Press
- 井上彰 (2010) 「平等の価値」(『思想』1038号, 120–148頁)
- Lippert-Rasmussen, K. (2016), *Luck Egalitarianism*, Bloomsbury
- 西口正文 (2015a) 「エリザベス・アンダーソンによる「運命の平等主義」批判」(『人間関係学研究』13号, 27–40頁)
- 西口正文 (2015b) 「自己の負うべき責任と〈能力の共同性〉」(『椋山女学園大学研究論集』46号, 社会科学篇, 35–49頁)
- Parfit, D. (1998), “Equality and Priority”, in A. Mason(ed.) *Ideals of Equality*, Blackwell, pp. 1–20
- Temkin, L. (1993), *Inequality*, Oxford University Press